

第一章 バレちゃいけない状況でぬるぬるクンニ♡

アーシェが物心ついた時には、この世界が前世でプレイしていた18禁乙女ゲーム、『学園らぶぱにつく!』——通称『らぶぱに』の世界であることに気が付いていた。

ヒロインは王子を筆頭とする五人の攻略対象キャラクターと恋愛をできるのだけれど、『らぶぱに』は、キラキラとした学園生活と甘い恋愛を楽しむ王道の乙女ゲーム……などでは決してなかった。

メイン攻略対象である俺様系王子をはじめ、冷徹な生徒会長、ミステリアスな魔法特待生、真面目な幼馴染騎士、そして包容力あふれる教師

という豪華絢爛なイケメンたち。彼らとの恋愛模様を描く作品でありながら、その本質は実に過激でハードなものだった。

ルートを一步踏み外せば、待ち受けているのは容赦のないバッドエンド。敵対勢力による凌辱や、攻略対象キャラクターからの過剰な快楽責めに、身も心も溺れて正気を失う快楽墮ちエンドなど、18禁作品の極みのような情け容赦のない展開がプレイヤーの情緒を揺さぶるダークな作風だったのだ。

——だけれど、そんな刺激的すぎる過酷なシナリオはアーシェには関係のない話。

なぜならアーシェ自身は、『らぶぱに』の本編に名前すら出てこない、背景と同義のモブ令嬢に過ぎないからだ。

ゲームの真の主役であるヒロインは、フローラという名の少女。

風にふわりと揺れる薄桃色の髪に、空のように澄んだ水色の瞳。守ってあげたくなるような愛くるしい容姿と、どんな困難にも負けない純粋な心を持った、まさに「ザ・王道ヒロイン」という出で立ちの女の子である。

破滅と隣り合わせの凄絶な恋愛模様も、過激なハプニングの数々も、すべてはヒロインであるフローラと、彼女を巡る五人の美形攻略対象たちが勝手に繰り広げるドラマに過ぎない。

（モブの私には、18禁特有の危険なイベントなんて一切起こるはずがない。影の薄いモブ令嬢として、高嶺の花たちのドタバタ劇を遠くから眺

めながら、平和で穏やかな学園生活を満喫してればいいんだから)

ここは確かに、一歩間違えれば惨劇が起こる18禁乙女ゲームの世界かもしれない。

けれど、モブである自分には何一つ関係がないのだ。

そう高を括り、アーシェは自分だけは安全だと信じて疑わなかった。

『らぶぱに』の舞台である、学園に入学するまでは。

入学してすぐに、アーシェは『らぶぱに』のヒロイン、フロラを難なく見つけることができた。

ふわふわと風に揺れる薄桃色の髪は、ただ歩いているだけでも目立つ。彼女は胸元に赤色のブローチを着けていて、青色のブローチを着け

ている新入生のアーシェより一学年上であることを示していた。

さらに彼女の存在が目立つのは、常に攻略対象キャラクターの誰かと一緒に行動しているからだ。特に多いのは絶大な人気を誇る俺様系王子のヴェクス殿下。美しい銀髪にエメラルド色の瞳を持つ超絶美形と共に並んで歩いているのだから、遠目からでも目立って仕方がない。

（学年が違うなら関わる機会なんてほぼゼロね）

アーシェは胸の中でこっそりガッツポーズを決めた。

とにかく、彼女たちのような「物語の主人公たち」とは接点を持たないこと。目立たず、出しゃばらず、ごくごく平均的な成績と立ち振る舞いを保ち、空気のように平穏無事な「平凡な毎日」を死守すること。

それこそが、過激な18禁乙女ゲームの世界で生き残るための、アーシ

エの絶対的な学園生活の方針だった。

「アーシェ君、悪いんだがこの資料を魔法化学実験室の準備室に運んでおいてくれないか？」

「あ、はい！ 分かりました、先生」

一日を締めくくる最後の授業が終わり、ようやく訪れた放課後の開放感に浸っていた矢先のことだった。クラス担任の教師から突然用事を言いつけられ、アーシェは一瞬きょとんとしながらも、すぐに愛想笑いを浮かべて快諾した。下手に断って悪目立ちするのも避けたいし、これくらいの雑用なら断るより素直に引き受ける方が「無難なモブ」として正しい選択だと思ったからだ。

アーシェは教師から重みのある資料の束を受け取り、軽く頭を下げた。要件を済ませた教師が教室を去り、ざわめく室内に取り残されたアーシェが息を吐いた、ちょうどその時。背後から思いがけない声が降り注ぐ。

「手伝おうか」

「！　セス様」

驚いて振り返ったアーシェの視界に、眩しい人影が映り込む。声の主は、同じクラスのセスルクライトだ。

彼は『らぶぱに』の本編にはあまり出てきていなかったけれど、第一王子ヴェクス殿下の弟——第二王子だ。ヴェクス殿下と同じく月光を溶かしたような美しい銀髪に、夜空を閉じ込めたような深い碧色の瞳。

基本的に、モブだろうがこの世界の住民は全員顔立ちが整っている。セスも例外ではなく、むしろ王子という身分のせいだろうか、人よりもキラキラとした雰囲気をもとっていて、まさに王子然といった風貌だ。

アーシェは見ていだけでドキドキと高鳴る胸を押さえつける。

「いえ、そんな。セス様に手伝っていただくなんて」

「でも、これ一人で持つていくのは大変そうだよ。それに、そんなに恐縮しないで。僕たち、同じクラスの同級生だろう？」

「う……。そ、それでは……。お言葉に甘えて、お願いしてもよろしいでしょうか」

実際のところ、教師から渡された資料の山は、女子生徒ひとりに持た

せるのはどうなのかというほどの量と重さだった。断っていたら準備室に着く前に腕が痺れて落としていたかもしれない。

アーシェはセスと資料を山分けにし、並んで歩き出す。その際、多めに資料を持ってくれたセスの優しさに、不覚にもときめいてしまったのは仕方がないことだろう。

魔法化学実験室は学園の東棟四階の隅にある。一年生の教室がある棟からはかなり距離があり、重い資料を抱えて移動するにはなかなかの重労働だ。

（それにしても、セス様と話すことになるなんて）

アーシェよりも頭二つ分ぐらい背の高い彼の顔を見ることはできないが、雲の上のような存在のセスと並んで歩いているという現状に不思議

な気持ちになる。

「アーシェさんって、いつも静かに授業を聞いているよね。実は前から気になっていたんだ」

（気になってた？ なぜ……？ モブの私なんて視界に入っちゃダメでしよう……!?）

「……そうなんですか？」

「うん。だって、みんなが先生の講義に飽きて退屈そうにしている時でも、アーシェさんだけはすごく熱心にノートを取っているだろう？ 特に『古代魔法史』の授業なんて、毎回びっしり綺麗に書いていて……実はこっそり感心していたんだ」

（見られてた！ 完璧に観察されてた！）

アーシェの背中に冷や汗がダラリと流れる。

それもそのはず、彼女が熱心にノートを取っていたのは勤勉だからではない。前世のゲームの知識を思い出しながら、「フラグを踏まないための攻略情報」を必死に作成していただけなのだ。古代魔法史の授業内容なんて、もちろん覚えていない。

「は、はいっ、恐縮です……！ ええと、一度聞くだけでは覚えるのが苦手な頭の出来なものでして……っ」

「そんなことないよ。実は一度、ノートを貸してもらおうか迷ったくらいなんだ」

「セ、セス様に私の汚いノートを見せるだなんてとんでもございませ
ん！ お役に立てるような代物では決してなく……！」

アーシェは顔を引きつらせながら、必死に手を振って辞退する。

するとセスは、腕の中の重い資料を持ち直しながら、ふっと笑みを浮かべた。

「そんなに恐縮しないでよ。それとも僕と話すのは、嫌かな？」

「め、滅相もございません!!」

「ふふ、冗談だよ。でも、こうして二人で話せて嬉しいな。教室にいる時のアーシェさんは、なんだか『気配を消す魔法』でもかけているみたいに控えめだから」

（セス様、勘が鋭すぎませんか……!? モブとして存在感を消す特訓をしてきた私の努力を一瞬で見抜くなんて……!）

アーシェは顔を引き攣らないようにするので必死だった。

「あ、でもね」

セスは少し声を落とすと、夜空のような碧色の瞳を悪戯っぽく細めた。

「そうやって一生懸命に気配を消そうとしている姿が、なんだか小動物みたいで可愛いなって思っていたんだよ」

（——っ!?)

不意打ちで投げかけられたストレートすぎる言葉に、アーシエの思考は完全にフリーズした。

耳の先端まで一瞬で熱が昇り、抱えていた資料を落としそうになる。

（な、何を言っているのこの王子様は!? 18禁乙女ゲームの王子様はモブ相手にも無差別に殺し文句を撒き散らす仕様なの!?）

真っ赤になって固まるアーシェを見て、セスはくすくす笑いながら、満足そうに微笑んでいた。

魔法化学実験室の準備室は、放課後という時間帯もあってしんと静まり返っていた。校舎の東棟の最果て、最上階の隅という場所も手伝って、周囲に人の気配は全くない。

「ここに置いておけばいいでしょうか」

準備室の奥にあるスチール製の作業机へ、ふたりで資料の山を置く。しばらく使われていなかったのか、室内には少し埃っぽい匂いと、薬品特有のツンとした空気が混ざり合っているようだった。

重い荷物から解放され、アーシェがふう、と息をついたその時だ。

先ほど通り抜けてきたばかりの魔法化学実験室の方から、密やかな話し声が聞こえてきた。準備室のドアには小さなガラスパネルがいくつか嵌め込まれており、そこから実験室の様子を窺うことができる。ちらりと小窓を覗き込んだアーシェは、息を呑んだ。視線の先に見えたのは、薄桃色の髪と、銀髪の二人の人物。

（あれは……フローラとヴェクス殿下？）

関わりたくない『らぶぽに』メインキャラクターたちの接近に、アーシェの脳内で警鐘が最大音量で鳴り響く。

このまま準備室から出ていくべきか、それともふたりが去るまで気配を消して潜むべきか。

迷っているうちに、「あんっ」という可愛らしい高い声が聞こえる。

「……あん？」

吸い寄せられるように再度ガラスパネル越しに覗き込んでしまったアーシェは、目に入った光景に我が目を疑った。

あろうことか、ヴェクスがフローラの乱れた服からこぼれ出る豊かな胸元に顔を埋め、その先端を狂おしく吸い上げていたのだ。

「んあっ……あ、あんっ……♡」

静まり返った実験室に、甘く可憐な高い声が甲高く響き渡った。

「!!!」

（ななな……！ 学園の教室で何やってるのー!?!）

アーシェはあまりの衝撃に完全なパニックに陥り、金縛りに遭ったようにその場に固まった。

ダメだ、見てはいけない。そう頭では分かっているのに、吸い付くような水音や、衣服が擦れる生々しい音に囚われて目が離せない。

ヴェクスはフローラの白桃のような胸の先端を舌で転がし、もう片方の柔らかい膨らみを大きな手で揉みしだいている。フローラは頬を朱に染め、瞳を潤ませながら、愛おしそうにヴェクスの銀髪に指を絡めて頭を掻き抱いている――。

それを見つめるアーシェの喉が、ごくりと生唾を飲み込む。

急速に熱が下腹部へと集まり、じゅわりと熱いものが疼くのをハッキリと感じてしまった。

（こ、これが……『スチルイベント』発生ってやつなの……!?）

ゲームの画面越しではなく、生身の人間が繰り広げる過激すぎる濡れ

場。その毒々しいまでの色気に、無自覚にも身体が反応してしまっていた。

熱に浮かされたように見入っていた、その時。

ぐい、と強い力で腕を引っ張られた。

「っ……!？」

「しー。静かに」

耳元で低く囁かれ、ハッと我に戻る。

振り返ると、すぐ至近距離にセスの顔があった。

そうだ、ここには彼もいたのだ。手で口を覆われ、アーシェはセスの胸の中にすっぽりと収まる形で向き合う格好になっていた。

セスはガラスパネルの向こうを一瞬だけ冷ややかな瞳で見やると、呆

れたように薄く苦笑した。

「あーあ、ヴェクス兄様、こんなところでやり始めちゃって」

「むぐ……、ど、どうしましょう。もう出ていくのはできませんし……」

……

口を押さえていた手を離してもらい、こそこそと話す。

「うーん、そうだね……。見つかったら兄様のことだから、口封じに何をされるか分からないからね。二人が出ていくのを待つしかないかなあ

……」

セスはアーシェの腰にそっと手を回し、さらに壁際へと引き寄せた。

隣の実験室からは、激しさを増していくフローラの甘い嬌声と、ヴェクスの責め立てるような言葉が漏れ聞こえてくる。「そんなに良いの

か？」「淫乱な女め」「もっとよくしてやろう」……ひいい、もうやめて！

アーシェは顔を赤らめながら俯いた。

四階の最果てにある普段人が来ない部屋とはいえ、防音でもない教室でこんなに激しく喘いで大丈夫なのだろうか。現に、こうして自分とセスという目撃者がすぐ隣に潜んでいるというのに。

（つていうか……セス様との距離も近すぎるっ!!）

隣から聞こえる卑猥な水音と喘ぎ声、目の前のセスから漂う優雅な香りと男らしさを感じる体躯。

ダブルの過剰な刺激に挟まれ、アーシェの頭と体温は限界を突破し、パニックを起こしそうになっていた。

息を詰まらせて真っ赤になっているアーシェを見下ろし、セスはふつと悪戯っぽく口元を緩める。

そして、吐息が触れそうなほどの至近距離で低く囁いた。

「耳、塞いでおいてあげようか？」

「え」

セスの長い指先がアーシェの頬を滑り、そのまま優しく両耳を包み込む。

（確かに、フローラの声は聞こえなくなった……けども！　これはこれで、心臓に悪いのですが！）

視界と感覚のすべてが、セス一色に染まる。

耳を塞がれたことで、外部の音の代わりに、アーシェの胸の中で暴れ

狂う心臓のけたたましい脈打ちばかりが脳内に響き渡ってしまう。

おまけに、耳元や後頭部に触れるセスの大きな手のひらの熱や、指先の感触が皮膚を通して生々しく伝わってくるのだ。

直前まで目撃していたフローラたちの濡れ場の残像と相まって、下腹部に残る甘い熱が一気に身体中へ駆け巡る。

（だ、ダメ……！ 息がうまく吸えない……！！）

吸い込まれそうなほど至近距離にあるセスの視線に耐え切れず、アーシェはたまらず目を泳がせ、セスの胸元あたりへと視線を逸らした。

けれど、視線を落とした先にある彼の首筋や喉仏のラインすらもが無駄に艶めかしく、アーシェの理性をじわじわと削っていく。

「……」

そんなアーシェの心中を知ってか知らずか、セスは耳を塞いだまま、顔をさらに近づけてくすぐすと喉を鳴らした。

「そんなに真っ赤になって……。可愛いね、アーシェさん」

耳を塞がれているはずなのに、骨を伝って直接頭の中に響いてくるような低く甘い声。アーシェの心臓は、もう破裂寸前だった。

「ね、キスしたくなっちゃった」

「ひゃい？」

言われた言葉の意味が瞬時に理解できず、裏返った声が漏れてしま
う。

「キス……してもいい？」

「……っ!？」

もう一度念を押すように囁かれ、アーシェは完全に押し黙るしかなかった。

（キス？　きす？　キスって……どういうこと？）

ぐるぐると思考停止していると、セスの顔がどんどん近づいてきて——唇の端に、柔らかい熱が押し当てられる。

ちゅ、と小さな水音が耳の奥でダイレクトに響き、口付けられた箇所
にじわじわと熱が灯っていく。

「……!？」

「ごめん、ちょっと。理性が……」

（ここが『らぶぱに』の世界だから!?　18禁エロゲー特有のバグった倫理観でキャラクターたちが動いてたりするの!?)

びっくりしてセスの胸を押すが、びくもしない。それどころか、耳を覆っていた彼の両手にぐっと力がこもり、逃げ場を完全に塞がれる。

再度セスの顔が近づいてきた。

今度は、唇にふに、と柔らかい感触が重なった。

「……っ！ ん……」

セスの唇がアーシェの唇の輪郭をなぞるように、優しく、けれど逃がさない強さで喰んでくる。

ふにふにと柔らかく喰まれるたびに、甘く痺れるような感覚がびりびりと伝わってきていた。抵抗することもできず、アーシェはじっと耐える。それどころか、直前まで目撃していたヴェクスたちの情事の残像と、耳元で聞こえる卑猥な音のせいで、自身の身体までもが甘い痺れに

翻弄され始めていた。

ひとしきり唇を喰まれたあと、セスは名残惜しそうに、ちゅ、と軽く音を立てて、ようやく唇を離れた。

「ん……はっ……」

酸素を求めてアーシェの口から熱い吐息が漏れる。

数十秒程の口付けで、アーシェの熱を帯びた唇は濡れてわずかに赤く腫れ上がり、視線はとろりと熱に浮かされていた。

セスはその艶っぽいアーシェの顔を至近距離で見つめ、満足そうに親指で彼女の濡れた下唇をそつとなぞる。

「……すごく、甘いね」

「セ、セス様……っ。何を……っ」

乱れた息を整えながら、ようやく紡いだ声は自分でも驚くほど甘く震えていた。

胸を押し返そうとするアーシェの手首を、セスは優しく、けれど優位を誇示するように捕らえる。

「……隣で兄様たちがあんな真似をしているせいもあるけど、いちばんは……君がそんな風は無防備で、可愛い顔をしているからだよ」

（どどど、どういうこと!? 何この展開!? しかも可愛い……って何!?)

セスが耳から手を離れたことによって、隣の部屋から漏れる卑猥な喘ぎ声が嫌でも耳に届く。

「あっあっ、ヴェクス様、んんっ♡そこ、舐めちゃ、やあ……♡ああ

ん♡」

二人の姿は見えないが、隣の部屋で彼らがどれほど濃密に絡み合っているのかは生々しく想像できた。目撃した光景の残像と耳を毒する音声、そして何より目の前で自分を閉じ込めているセスの体温。重なる過剰な刺激に、アーシェは顔から火が出ているのではないかと思うぐらい熱くなつていくのを感じていた。

セスはアーシェの耳元へと顔を寄せ、密やかに囁く。

「もっと気持ちいいこと、しちやおつか？」

「……!!」

セスは熱のこもった瞳でアーシェを見つめる。

本来なら全力で拒否すべき場面だ。

けれど——アーシェもまた年頃の女の子であり、性的な好奇心がないわけではなかった。だからこそ、前世でも『らぶぱに』のような18禁の乙女ゲームを好んでプレイしていたのだ。

そしてアーシェがフローラ達を避けていたのは、あくまでこの『らぶぱに』の過激すぎてダークな凌辱ルートや快樂墮ちバッドエンドといった危険なルートに足を突っ込まないようにするためであって。

（待って……セス様は『らぶぱに』では出番の少ないサブキャラクター……。つまり、ただのモブ王子よ？　モブである彼と私が何をしよう、危険なことには巻き込まれない……？）

脳内で「モブ同士なら安全」という考えが組み上がっていく。

前世の知識と、下腹部を突き上げる甘い熱。それらが理性をじわじわ

と侵食し悪魔の囁きとなって、アーシェの判断力を惑わせていた。

何も答えられずに赤面したまま固まるアーシェに、痺れを切らしたのだろうか。セスがやんわりと制服の上から胸を触る。

「あっ……！」

セスの指先が柔らかい円を描くように優しく揉みこむと、アーシェの身体は驚くほど敏感にその動きに反応し、ぞくぞくとした強烈な痺れが背筋を駆け抜けた。

「……あっ、……ん、く……」

声は出せない。隣のフロアとヴェクスに聞かれたら、終わりだ。いろいろと。

声を殺すために必死で自分の唇を噛み締めるアーシェに、セスが再び

唇を重ねてきた。

先ほどまでは唇を喰む触れ合いだったのが、今度はぬるりと熱い舌が割って入り、口内へ深く差し込まれる。

「……あふ……♡」

ちゆく、ちゆく♡と卑猥な水音が耳の奥で響く。舌の表面をざらりと舐められ、容赦なく奥まで吸い尽くされる。かと思えば、今度は舌の裏側にまで潜り込まれ、裏筋を細かく舐め回されて、唾液を注ぎ込まれた。こぼれ出そうになる液を必死にくくん、くくんと飲み込めば、セスは満足そうに目を細め、喉を鳴らした。

セスの愛撫の手は止まらない。器用な指先が、アーシェの制服の胸ボタンを一つ、また一つと手際よく外していく。

露出したブラジャーは、淡いピンク色でレースが施された可愛いものだ。

「かわいい……」

ぼそりと呟かれ、恥ずかしさで顔が熱くなると同時に、胸の奥がきゅんと甘く痺れる。

セスの手が下着のカップをずらすと、その下に隠されていた小ぶりの胸が、彼の目の前に無防備に晒された。

既に桃色の蕾はつんと立ち上がっている。それをじっと、甘く熱を帯びた瞳で見つめられ、アーシェは全身を羞恥で強ばらせた。

セスはその立ち上がった蕾に見せつけるように舌をべろりと出し――、口内に含み、一気に甘く吸い上げた。

「——んッ、う……っ♡」

途端、言いようのない快感が突き抜ける。

（あっ♡乳首って、こんなに気持ちよかったっけ……っ？♡）

口いっぱい頬張られた蕾を、濡れた舌がぬるぬる♡と舐め責める。

ちゅこ、ちゅこ♡ちゅこ、ちゅこ♡

「あぁっ……♡ん……っ、あ、あ……っ♡」

吸い上げ、転がし、扱くように器用に舌を動かされるたび、甘い痺れが下腹部へダイレクトに突き抜け、たまらずアーシエは腰をくねらせた。

ぎゅっとセスの肩を掴み、必死に背中を反らせる。

隣の部屋から漏れ聞こえる情事の音と、自身に注がれる甘い愛撫。

声を出すわけにはいかないのに、アーシェの理性は追い詰められていた。

「セス様……っ、だめ、だめです……っ」

かすれた小さな囁き声で、たまらず抗議の声を絞り出す。

「ん……、だめ？　こんなに可愛がって欲しいって主張してるのに？」
ちろちろと舌先を蠢かせ、こりこりに硬くなった乳首をぴんぴん♡弾きながら、セスが囁く。

（胸元で、囁かないでほしい……っ！）

セスの端正な顔で卑猥なことをしている事実が、刺激が強すぎて身体が跳ねてしまうのだ。

「あう……♡　だって、こんなの……っ」

「ああっ♡ ヴェクス様、クリトリス、気持ちいいのお♡」

その時、壁の向こうから一際甲高く淫らなフローラの嬌声が耳に飛び込んできて、一体彼らはどんな過激なことをしているのだろうと真っ赤になる。

「ふふ、顔真っ赤にして、本当に可愛いね、アーシェさん。ここ、舐められるの興味ある？」

「なっ、ひゃあっ」

セスはその場に膝をついてしゃがみ込むと、躊躇いもなくアーシェのスカートを押し上げ、その中にするりと頭を潜り込ませた。

「セス様、何を……っ」

見下ろせば、自分のスカートの中に王子がすっぽりと収まっていると

いう、あまりにも恐ろしい光景。

さわさわと太ももの内側から下着の布地を撫で上げられ、全身をぞくぞくとした強烈な快感を感じる。

くちや……♡

「あっ、あ……っ♡」

下着越しに触れられた手が、粘り気のある水音を立てる。自分自身から溢れ出た愛液のせいで、既に下着のクロッチ部分がぐっしりと湿り気を帯びているのがハッキリと分かってしまった。

次の瞬間、柔らかな熱い舌先が湿った下着の布地越しに触れ、秘肉の頂点——固く尖った淫核をぐりぐり♡円を描くように押し潰してきた。

「んっ……♡ふっ、う……♡あっ……っ♡」

くちゅ♡ちゅる♡じゅっ、じゅるるうう♡

「んううっ…!!♡♡」

布地の摩擦と唾液の湿り気が合わさった、鈍くも激しい刺激。舌を這わされ、舐めるだけでなく吸い上げられもして、びくんと腰が揺れる。

感じたことのない快感が下腹部から伝わり、アーシエは膝の力を失い、壁に背中を預けて滑り落ちそうになる。

声を上げてはダメだと言い聞かせながら、口元を自らの手で必死に覆い、甘い喘ぎ声を押し殺すことしかできない。

セスの指先が下着の脇を滑り、下へとずらす。ひんやりとした空気に蜜裂が晒された。

アーシエは羞恥と期待に腰を小さく震わせる。

ちゅくっ、ちゅくっ、じゅるっ♡♡

「——っ!! おづ……………っ♡♡」

（セス様の……熱くてざらざらした舌が、クリトリス舐めてるぅ……っ♡）

声にならない喘ぎが口元から漏れ出る。

セスは、ぷっくり膨れたクリトリス全体をぱくり♡と唇で吸い含み、柔らかな舌先で器用にこりゅこりゅ♡捏ねくり回してきた。敏感すぎる裏筋をやわくぴんっ、ぴんっ♡と弾くように擦り、その間もぢゅううっ♡と口腔全体で強い圧をかけて吸い上げられる。

「あっ、あ……っ♡ん……ううう♡」

（なにこれっ♡気持ちいいっ……、気持ちいいしか考えられなくなる

……っ、うあっ♡)

溢れ出た透明の愛液が零れ落ちそうになると、セスはそれを一滴も垂れ流すまいと、べろり♡と熱い舌でおまんこ全体を隙間なく舐め、掬い取っていく。

「ふ……♡すごい、たくさん溢れてるよ。おまんこべろべろされるの気持ちいい？」

スカートの中から、セスの熱い吐息が直接淫核を叩き、アーシェはたまらず彼の銀髪に手を置いてしがみついた。

「あう……、おまんこべろべろ……、きもちい……いい♡」

「ああ、たままないよ、アーシェさん。もっと気持ち良くしてあげる」

(もっと……っ、何を……)

セスはゆっくりと秘部に指を這わせて、そのままじゅぷり♡と蜜口に挿入する。

「あっ……♡♡」

※この続きは本文で♡

第四章 フローラと5人のイケメンたち

フローラが前世でやり込んでいた18禁乙女ゲーム、『学園らぶぱにく！』通称『らぶぱに』の世界に生まれ変わっていると気付いた時、それはもう「なんて運が良いんだろう！」という感想しかなかった。

フローラは男女の関係において、少し手荒に扱われたり虐められたりするのが大好きな性癖の持ち主だ。ちよつと無理やりされるぐらいの方が断然興奮する。そんな彼女にとって、過激でハードな展開が売りの『らぶぱに』の世界観は、まさにドがつくほどの好みのストライクゾーンだったのだ。

18禁ゲームとあって、内容は刺激的だし登場人物たちの倫理観もちよ

つとぶっ飛んでいる。けれど、彼女にとってはそれくらいが丁度いい。フローラはこの学園に入園して以降、ほぼ毎日といっていいほどイケメン攻略対象たちとの激しい性行為に勤しみ、その異常な快楽を全身で貪っていた。

（中略）

「いよいよ待ちに待った逆ハーレムルートの完成……♡」

大好きな男性たちに愛され、ぐちゃぐちゃに苛まれる最高の夜が始まる。

フローラは心からの満足感を胸に、さらなる快楽の渦へと嬉々として身を投じていくのだった。

第一王子のヴェクス様、クールな生徒会長のラルフ、ミステリアスだったが仲良くなった魔法特待生のヒューゴ、真面目な幼馴染騎士のカイ、そして包容力溢れる体育会系のサウリ先生。

とある高級娼館の一室。巨大なキングベッドの上では、思わず惚れ惚れとするほどの極上イケメン五名が、すべての衣服を脱ぎ去り、完璧な体躯を晒している。そして同じく白い肌を剥き出しにし、裸体となったフローラを、嬉々として囲み込んでいた。

フローラはベッドの上でしなやかに膝立ちになると、正面に立つヴェクスの反り勃つ極太のペニスを両手で支え、あむっ♡と深く、愛おしそうに口内へ迎え入れた。ずっしりとした重みと、すでに太い血管を浮き立たせている怒張の熱気。それを丹念に、舌先と口腔全体を惜しみなく

使って奉仕していく。

「はあ……ッ、フローラ、いいぞ……っ」

「ヴェクス様だけズルいですよ。僕たちのことも忘れないでください」
「手動かすのさばらないでね」

両隣に構えるラルフとカイが、待ちきれないといった様子でそれぞれの肉棒を寄せてくる。

フローラは口内での奉仕を止めないまま、両手を伸ばして二人のペニスを握り締め、ぬちゅ、ぬちゅ♡と甘い手つきで同時に扱き上げ始めた。

さらに背後からは、ヒューゴとサウリ先生が逃げ場を塞ぐように密着してくる。大きな手先が左右から伸び、フローラの豊満な両胸を思う存

分揉みしだいた。柔らかい肉感を手のひら全体で味わいながら、熟れた果実のような乳首を指先できゅっ♡とつまみ、こりこり♡と爪の先で擦り上げて快感を煽ってくる。

「んあっ♡ふっ……♡んむ、じゅっ♡んちゅっ……♡♡」

前も、横も、後ろも——全身のあらゆる部位を大好きな男たちの熱量と手つきで占有される至福。フローラは快感で瞳を潤ませながら、さらに奉仕の速度を上げていった。

するとヴェクスの大きな手がフローラの後頭部を強く引き寄せた。力任せに頭を固定され、ぐっと腰を押し付けられる。

「んごっ、んぶっ……、んっ♡んっ♡♡」

ぐぼっ♡ぐぼっ♡容赦なく喉奥まで太い肉棒を突き挿れられ、唇の隙

間から空気が抜けていく。粘膜が引き伸ばされ、目の前がチカチカと点滅するような圧迫感。けれどフローラにとってはそれは苦痛ではなく、至高の瞬間だった。ヴェクスにこうやって力づくで支配され、乱暴に口内を犯される感覚が、たまらなく好きで仕方がないのだ。

喉を鳴らして熱狂的な視線を差し向けるフローラに、ヴェクスが唸る。

「本当に、おまえはどこまで淫乱な女なんだ」

「まったくです。ヴェクス様ばかりにいい思いはさせませんよ」

後頭部を掴むヴェクスの手がさらに力を強め、激しいイラマチオのようなピストンが始まった。同時に、両脇のラルフとカイの怒張も熱を帯び、背後のヒューゴとサウリ先生の指先が、フローラの下腹部や秘裂へ

と伸びていく。

すでにフローラの蜜口からは溢れ出た愛液がとろとろと垂れ流れており、シーツにまで淫らな糸を引いて大きなシミを作っていた。

魔法が得意なヒューゴが、フローラの身体に『感度を極限まで高める補助魔法』を密かに唱えながら濡れそぼる秘肉の隙間へ指を這わせる。そしてぐぶり♡と二本の指を根本まで挿入した。そのままぐっちゅぐっちゅ♡とざらざらした天井を力強く擦り上げる。過敏になった粘膜をダイレクトに責め立てられ、フローラは瞬く間に絶頂へと追いやられた。

「んおっ♡おっ♡んぶっ♡♡んんっ~~~~♡♡♡」

ぶしゃあああっ♡♡ちよろちよろちよろっ♡

勢いよく潮を吹き上げても、男たちの容赦ない手つきが緩まることな

ど期待できるはずもない。ヒューゴの指はさらに速度を増して膣内を掻き乱し続け、ヴェクスによる力強いイラマチオの腰使いも一向に留まる気配を見せなかった。フローラにペニスを扱かせていた幼馴染のカイは、痺れを切らしたように身を乗り出し、フローラの耳孔へぐぽりと湿った舌を突き挿れて、奥まで舐め回す。

「んぐっ♡ おごっ♡ おっ……っ♡♡ んぶうっ……っ♡」

普段は理知的でクールな生徒会長のラルフでさえ、フローラの豊満な胸元に顔を埋め、おっぱいに容赦なくむしゃぶりついてきた。

（あはっ♡ いつもはあんなにクールなラルフが……っ！ おっぱいに夢中で吸い付いてるの、えっちすぎてたまないっ♡♡♡）

さらに足元からは、サウリ先生が大きな手でフローラの足首を掴み、

その可憐な足の指先をくちゅくちゅ♡卑猥な水音を立てながら一本ずつ舐め吸っていた。

※この続きは本文で♡